

特集「COVID-19 パンデミック発生期の教訓と次世代への提言②」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科
統合生理学

八木田 和 弘



国内で初めての COVID-19 感染者が確認された 2020 年 1 月 16 日から、ちょうど 5 年となる 2025 年 1 月号の特集は『COVID-19 パンデミック発生期の教訓と次世代への提言②』です。前号に引き続き、COVID-19 パンデミックがもたらしたことについて、さまざまな側面から記録として残し、また蓄積されたデータを解析することで、歴史の評価に耐えうる貴重な資料となる論文をご寄稿いただきました。全く前例がなく、ましてやガイドラインなど存在しない中で、世界中が暗中模索であった。このような中、特に本学において経験され、その中から生み出された研究について、それぞれの立場でそれぞれの観点からまとめたものが、今回の 2 号にわたる特集です。非常に貴重な記録や解析結果の数々に目を通し、改めて驚きと未知の感染症の脅威を感じるとともに、おそらく後世において非常に貴重な示唆となる意義深い特集となっています。

本号においては、COVID-19 パンデミックを経験し、その対策に目を向けた研究も含め、多くの先生方にご寄稿いただいた。牛込先生には、内分泌・糖尿病内科における COVID-19 研究に関してご紹介いただき、感染制御・検査医学教室の貫井先生からは本学における COVID-19 対応の軌跡と科学的知見の創出について、循環器内科の池村先生からは SARS-CoV-2 ウイルス感染機序を利用した高親和性 ACE2 デコイに関する研究について、パンデミックの検証と将来への展望を含めた内容となっています。ゲノ

ム医学の高島先生からは COVID-19 感染におけるサイトカインストーム発症機序について、家原先生には、COVID-19 パンデミックの渦中にある小児医療における教訓と次世代への提言という重要なメッセージを込めた論文をご執筆いただいています。いずれも COVID-19 パンデミックとは何であったのか、そしてそこからどのような学びがあったのか、について多くの知見が含まれています。

さて、今回の特集の企画にあたって、改めて当時を振り返って考える機会にもなりました。筆者自身は基礎医学分野であることから、もちろん現場に立つことはなく、病院内にも長く足を踏み入れることを禁じられていた身であり、何かを申し上げることを躊躇する思いもあります。しかし、だからこそ、俯瞰的に本学附属病院を見ていて改めて感じていたことは、「現場力」の強さでありそのレベルの高さでした。最前線で治療にあたる医師をはじめとする全ての医療者、そして特に直接患者と接する看護師の皆さんの献身無くして COVID-19 パンデミックは語れません。本学の特色であり強みは「現場力」のレベルの高さであることを、肌感覚として実感した 3 年半でした。そして、その現場の戦いの中から明日の医学が生まれるプロセスをリアルタイムで見るという経験は、筆者自身、大きな学びとなりました。

パンデミックの最前線で戦い続けた全ての医療者の方々に、改めて心より敬意を表します。